

原子力委員会

長計についてご意見を聴く会（第17回）議事録

1. 日時 平成16年10月20日（水）17:00～19:15
2. 会場 青森グランドホテル 2階 平安の間（青森県青森市新町1丁目1-23）
3. 出席者（敬称略、五十音順）

ご意見を伺った方々

芦野 英子（弘前市）
荒木 茂信（東北町）
木村 将人（尾上町）
疍 清悦（天間林村）
二本柳晴子（六ヶ所村）
三笠 朋子（八戸市）

原子力委員会

齋藤委員長代理、木元原子力委員、前田原子力委員

新計画策定会議

井上 チイ子（生活情報評論家）
笹岡 好和（全国電力関連産業労働組合総連合 会長）
未永 洋一（青森大学総合研究所 所長）
伴 英幸（原子力資料情報室 共同代表）
吉岡 斉（九州大学大学院 比較社会文化研究院 教授）

内閣府

後藤企画官、森本企画官、犬塚補佐

4. 議題

（1）核燃料サイクル政策について

5. 配布資料

長聴第17-1号 新たな「原子力の研究、開発及び利用に関する長期計画」の検討状況について

長聴第17-2号 各視点からの基本シナリオの評価の要約（案）
（新計画策定会議（第9回）資料第3号）

6. 議事概要

事務局より、出席者の紹介、配布資料の確認、配布資料についての概要説明があった。

【齋藤委員長代理より開会の挨拶】

(齋藤委員長代理) 齋藤でございます。本日は原子力委員会主催の国際会議を東京で開催しております、そちらに出席するため委員長が欠席しておりますので、代わりまして私の方からご挨拶をさせていただくことをお許しいただきたいと思っております。皆様方におかれましては、「長計についてご意見を聴く会」に、ご多忙中のところ多数ご出席賜りまして誠にありがとうございます。「原子力の研究、開発及び利用に関する長期計画」につきましては、本年6月21日に「新計画策定会議」の第1回目の会合を持ちまして、これまで都合9回審議を重ねてきております。また、原子力委員会としまして、「新計画策定会議」に先駆けて本年1月より「長計についてご意見を聴く会」を開催し、各界、各層の方々から、多種多様なご意見を賜ってまいりまして、それをまとめて「新計画策定会議」にご報告をしてきたわけでございます。さらに、原子力施設の立地県につきましては、これまで3県の知事さんに東京の方においでいただきまして、ご意見をうかがう機会を設けさせていただきました。去る9月24日には、当青森県の三村知事にもお越しいただきまして、その時には、「新計画策定会議」の委員と、一般公開の形で知事より貴重なお話を賜った次第でございます。今回の開催につきましては、特に平野良一様を代表とする方々や、また六ヶ所村にお住まいの方々から、是非、現地でこういったご意見を聴く会を催すようにというご要望がございまして、今回で第17回目となるわけでございますが、初めて東京以外で開くものでございます。本日は青森県にご在住の6人の方々からご意見を賜り、また、折角の機会でございますので、時間の許す限り、会場の方々からもいろいろなご意見を賜りたいと思っている次第でございます。

「新計画策定会議」では、これまで核燃料サイクル政策について審議を重ねてまいりましたが、まだ結論を出すには至っておりません。その中で、去る18日、報道の方で、原子力委員会は核燃料サイクルを基本的に維持する方針を固めたというような報道がございましたが、そのような事実はまったくございません。本日いただきましたご意見もまとめまして、10月22日(金)の次回の「新計画策定会議」にご報告をいたし、「新計画策定会議」のメンバーの審議にいろいろと活用させていただきたいと思っている次第でございます。是非、忌憚のないご意見、建設的なご提案を賜ることを期待いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【司会進行：木元原子力委員】

(木元原子力委員) 木元でございます。今日は進行役をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。ご発言は、皆様方に予め申し上げておりますが、まず、お一人5分ぐらいずつでよろしくお願いいたします。今日はご意見を聴く会ですので、ディベートではありません。

観客の方々も、意見をまず聴いてください、そして成熟した進行、紳士的、淑女的な会が持てたということを、誇りにしたいと思います。いただいたご意見を策定会議に反映させていただきたいと思います。それでは、三笠さんの方から発言していただけますか。よろしくお願いいたします。

【三笠朋子氏のご意見】

(三笠氏) 八戸から参りました三笠と申します。よろしくお願いいたします。一昨日、18日の朝、新聞を見て、目を疑ってしまいました。六ヶ所核燃料再処理工場2006年操業へゴーサインという見出しが躍っていたからです。でも、先程の説明で、まだ審議中ということをはかかって本当に安心しました。ありがとうございます。しかし、たとえ原子力委員会で核燃料サイクル政策の意見が出たとしても、三村知事が安全協定を結ばなければ、再処理工場は稼働できないはずではないでしょうか。知事選挙立候補予定者の公開質問状で、国策なので進めるともおっしゃっていましたが、同時に、県民投票条例について、住民自治への参加のあり方としては、当然あってもいい法だと考えている、今後検討する、とも答えていらっしゃいます。先程、東海村の再処理工場から放射性ヨウ素を漏らしながら、最初の発表ではそれを伏せるということがありました。保安規定の14分の1の量なので、安全に問題はないということですが、漏れたヨウ素129はその半減期が1600万年で、私たちの感覚で言えば、自然界にないものが漏らされて、それが永久に存在してしまうということです。こんな核燃サイクル機構のやり方に、きっと三村知事は怒ってくださるでしょう。今日のこの場に知事がいらっしゃれないのは、本当に残念です。今年の県民意識調査では、核燃料・原子力関連施設の安全性に不安を感じている人が81.6%もいました。私もまた、その一人で、いまだに再処理工場は必要だとの説明に納得できません。日常的に出される放射能を含んだ排水や排気、確かに放射能は少し出るけれども、煙突が高くて、広く拡散するから安全と言われても、薄まっても出た量は変わらないのではないかと感じてしまいます。国策だから、大丈夫だとも言われるんですが、放射能の寿命を考えると怪しいものです。プルトニウム239の半減期は2万4千年。今から2万4千年前は石器時代ですよ。これから、2万4千年先まで国が管理してくれるなんて、信じろという方が無理なのではないでしょうか。北村知事が核燃の受け入れを表明されてから19年。県民はまだ安心できないでいるんです。放射能の被害はすぐに現れないと聞いています。この会場にいる私たちが死んだ後の、これから先の若い世代が被害を受けるのです。少なくともこれからの青森県を担っていく子供たち、せめて大学生、高校生が十分納得した上で進めていってほしいと願っています。今日、私たちは4人の子供たちの母親としてこの場に来ました。子供たちには、今日、核燃のお話をしに行くから夕飯はカレーを温めて食べてねと話してきました。母親として、将来に

渡って安全な環境や食べ物を確保することは、毎日の食事を作ると同じように大切なことだと思っているからです。そこで是非、原子力委員の方々にお伺いしたいのですが、気の遠くなるような長い時間の単位で考えなければならない原子力の長期計画とは一体、何年先まで見据えたものなののでしょうか。千年ですか。万年ですか。青森の子供たちは、将来に渡って何の心配も不安もなく、暮らしていけるのでしょうか。青森県に生まれたことを誇っていいのでしょうか。三年ほど前、フランスのラ・アーグの近くに住む「怒れる母親たち」のメンバーのお話をうかがう機会がありました。彼女たちの不安や怒りは六ヶ所の再処理工場が動き出せば、まさに30年後の私たちの不安です。八戸に住む私にとっても、自分自身の問題なんだと気がつかされました。テレビや広報誌で安全安全と繰り返し宣伝される一方で、私たちはまた、ラ・アーグなどの苦しみも聞いております。この大きなギャップをどう理解すればよしいのでしょうか。ともかく原子力委員の皆様には是非、勇気ある、良識あるご判断をお願いしたい。再処理なんてとんでもない。原子力発電所もすぐやめてほしいくらいです。もう、これ以上、次の時代へ負の遺産を増やさないでください。ありがとうございます。

(木元原子力委員) ありがとうございます。それでは続いて二本柳さんお願いいたします。

【二本柳晴子氏のご意見】

(二本柳氏) 私は下北半島六ヶ所村に長年生活してきた住民のひとりとして発言させていただきます。本日は、原子力委員会の「新計画策定会議」において現在審議されている核燃料サイクルに対する県民の考えを聴く会と理解しておりますが、これに対して、私の考えを述べさせていただきます。その前に下北半島の開発の歴史を簡単に申し上げます。青森県の下北半島はご承知のとおり、やませ地帯の影響で夏も比較的低温で、冬は降雪も多く、寒い土地柄であることから、農業も不作、凶作に悩まされ、工業も発展が遅れている地域でした。村民は大半が出稼ぎに頼っていましたが、このような状況から青森県は下北開発を県政の重要課題と取り組み、農業面では昭和30年代、砂糖の原料となるビート栽培の推進を図り、また、稲作奨励なども取り組まれてきました。しかし、砂糖工場の閉鎖や国の減反政策によって、これらの取り組みは頓挫してしまいました。また、工業面で、昭和38年にむつ製鉄会社の話もうまく進まず頓挫してしまっただけです。また、昭和44年には、構想が閣議決定されたむつ小川原開発についての石油化学コンビナートを建設する計画でしたけれども、石油ショックの影響もあり、石油備蓄基地が立地するにとどまりました。このような歴史は私たち住民として下北半島の開発の難しさを実感させられることであり、一方では、国策への不信感を募らせることとなりました。このような状況の中で、核燃料サイクル施設に関する立地申し入れが昭和59年にあったのです。下北半島は原子力船むつの寄港や、東通、大間原

子力発電所の受け入れなどがあり、原子力行政の道のりは決して平坦なものではなかったと思います。サイクル施設の立地に関しては、私の住む六ヶ所村においても、当時は村を二分する騒然たるものでした。当時は、家族、親戚、地域の混乱は計り知れないものがありました。原子力への理解がないままに、チェルノブイリ事故などが発生し、住民の不安、誤解から、大規模な反対派が押しかけるなど、村に大混乱をきたしたことが思い出されます。こうした現状の中で、地元住民の私たちとしましても、再処理工場の正しい知識を持つということ、いろいろな勉強会を始めました。私たちは原子力の専門家や女性科学者なども含めて事業者の方からの説明やお話を熱心に聞き、原子力発電所や施設なども幾度か見学をいたしてまいりました。このように、いろいろな活動や経験を通して感ずることは、私たちが国の原子燃料サイクル政策に協力していくことは、国の国策に繋がるということを確認し、日本原燃と共に歩んできたわけでございます。是非、再処理工場も日本原燃が安全に操業していただきたいと願っております。今までの経過をたどりますと六ヶ所村は核燃料サイクル施設を受け入れたことで、出稼ぎは少なくなり、経済面はもとより教育文化面でも、計り知れない躍進を遂げております。今でも反対の人はいて、難しい状況もありますけれども、私たちは今後共に日本原燃が行う、原子燃料サイクル事業を他所に誇れる地元の産業として育てていくことが大切であると思っております。つまり、原燃と共に共存していくことが、地域発展に繋がることだと強く確信しております。国に対して要望ですけれども、原子力政策、核燃料サイクル政策に対して、責任のある方々におかれましても、是非、こうした立地を受け入れて以来の先人の苦労や努力を忘れずに、私たち立地地域の住民の気持ちを理解していただきたいと思っております。そして六ヶ所村でも核燃料サイクルが安全、より安全に、より円滑に進められるよう、政策決定し推進していただきたいと思っております。これと同時に、核燃料の必要性を日本の国民の皆様にも理解していただけるように努力を今後とも継続していただけるように強く願っております。ありがとうございました。

(木元原子力委員) ありがとうございました。それでは、三番目として昉さんお願いいたします。

【昉清悦氏のご意見】

(昉氏) はい、私は「お笑い原子力政策」というテーマでお話します。青森県民、特に農業者にとって、再処理工場は疫病神でしかないわけですが、国民には信用されず常に不安を与え続けている原子力政策とは一体どんな人が考えているのだろうと気になっていました。どうすればこんなに理解に苦しむような政策になってしまうのか、不思議でしかたがありません。そこで、この原子力政策の笑いどころについてお話します。一つ目、一体誰がどのよ

うにどんな基準で、原子力委員会の委員を選んでいるんだということ。時代はすでに中央集権から地方分権に変わったことも知らず、いまだに中央で決めたことを地方に押し付けることができると思込んでいる。時代の流れに取り残された方々のように思います。二つ目、世間の感覚と非常にかけ離れているということ。国民にすれば、原発も再処理工場も最も危険に思える存在であるにも関わらず、原子力マネーの虜になったような方々は何があっても安全、安全。まるで、目くそも鼻くそもきれいです、自然放射線に比べ微量です、がんや白血病との因果関係ありません、と理屈を並べて、目くそはこっそり付けたまま、でかい鼻くそはほったに付けたまま、平気で街中を歩く小汚いおじさん、お婆さんのようなものです。三つ目、フランスとイギリスに何のために再処理をお願いしたんだということ。プルトニウムをいずれ使うつもりで委託したのであれば、できた時点でもらうべきだと思います。まるで、精米所に精米をお願いしておきながら、肝心の白米を置き忘れて、ゴミにしかならない、高レベル放射性廃棄物である籾殻をせっせと持ちかえるお客さんのようなものです。そして今度は、自分で精米した方がいい、再処理する現行の核燃料サイクル政策を基本的に維持する方針を固めたと言い出す始末。まずは精米所から自分の米を持ってきて、色々な具を混ぜて一緒に炊けば、混ぜご飯のMOX燃料がすぐにできるでしょう。プルサーマルをやりたのであれば、同じようにすればいいんじゃないですかと、付ける薬がないと言われる方々に私は言いたい。四つ目、米軍三沢基地が隣にあることを知らなかったんじゃないのということ。いくら工場の周りの警備を強化しようが、上から落ちてくるミサイルはどうしようもないでしょう。本来、六ヶ所村が候補地となった時点で、原子力委員会がこれを理由に、六ヶ所村は再処理工場の建設地に適さないと言うべきでした。それとも、案外、海外にあるプルトニウムは日本まで運ぶとなると時間がかかるという論理と同様に、アメリカが北朝鮮を攻撃する際に、本国から劣化ウラン弾を運んでいては間に合わない、ウラン濃縮工場から出る劣化ウランを使ってもらえば、時間短縮とゴミ減量で一石二鳥、なんていう落ちまで考えていたとすれば、漫才のネタとして、十分使えると思います。五つ目、処分場などの施設の受け入れ先が見つからないとあなた方が言うなということ。新聞記事に載ったコメントが本当だとすれば、最終処分場も受け入れ先が見つからないということではないですか。本県は最終処分地にならないと決まっている以上、再処理に必要な最低条件は、事前に最終処分地を確定させることです。それができないのであれば、再処理しなければいいだけの話です。トイレなきマンション。原子力委員会が作る原子力政策は、今がそうだということではなくて、当初から、原子力は何があっても安全合唱団という原子力マネー大好き芸人が、漫才のネタとして作ったようなものだったと言っておきたい。六つ目、放射能くさい野菜を買う物好きがいるのかということ。農業者にとってこれは正に死活問題。私が今後さらに農業に力を入れていいものか、あるいは、とっとと青森県から脱出する準備を始めた方がいいのか、

という非常に重要な問題です。ご来場くださった皆様、そして、委員及び発言者の皆様、是非ともアンケートにご協力ください。

(木元原子力委員) ありがとうございます。次に、木村さんお願いいたします。

【木村将人氏のご意見】

(木村氏) 尾上からきました木村といいますが、まあ、お三方の方はかなりこう、勉強して発言の場に来ておりますけども、私は甚だなんといえますかという感じです。ただ、言いたいことは、山ほどあるのです。お前どっちかといえ言われたら、どっちなんだろう、と今でもふわふわしてるんだと思うんです、私自身が。いろんな場面で、いろんな方たちと話をしても、100%白だとか、100%黒だっているのは、まずないです。今は夜だから、こうして電気つけてますけれども、もしこれを昼にやったとしても、電気を使ってるわけですよ。お前は原発賛成か反対かって言えば、いや、俺も電気使っているしなあという負い目があります。そんな立場から、あるいは、でも、やっぱり今のお隣の方のお話を聴けば、かなり危険な代物だよなということも昔から認識してました。ただ、どうなんでしょう。じゃあ、どうすればいいのということになったときに、私はこういう考え方で今まで生きてきました。悪という言葉、善という言葉、これ絶対悪ということはないだろうし、絶対善ということもないのではないかと。とにかく現実を見なければダメなんだよなということで、どこかで納得というか、我慢しあうというか、そういうことで現実を見ていかなければならないのではないかと。その中のひとつとして、この原発のこととか、核燃のこととか、こういう長期計画のこととかというのを考えてみたときに、意外と日本人の感覚というのは、大人の感覚が今は育ってきているなという感じを今は持っています。「ダメなものはダメだ！ダメ！絶対ダメ！」とおっしゃる方もいましたけれど、そういうところからは何にも生まれてこないんじゃないかと。この辺はダメだけど、この辺はもうちょっと何とかしてくれよと。たとえば、あまりにも、日本原燃で、次から次へと不祥事が続いてきた。どうしてくれるのよということも当然我々は、あるいは私も発言してきました。そういう場面では、これからがんばりますというのであれば信じるしかないんじゃないかなという気もします。そして、では、是非、我々のこの電気をしっかり確保してくださいよと、やっぱり私は頼むしかない。この前まではワープロ使ってた、ワープロぶっ壊れて、今度やっとパソコンをなんとかかんとかカチャカチャやってる。やっぱりああいうのも電気が無ければダメだろうし。これはこじつけなのか分からないんですけども、意外とこういう話をすれば、納得するんですよ。私は立場上、自然食、野菜とか環境の問題とか、エネルギーのことにもボランティアとして、企業として関わっていますけれども、それこそ企業努力をすれば、六ヶ所産の無農薬の野菜、

我々が作りました、是非、原子力関係の方たち皆さん買ってくださいよということだって、ひとつの生きる道ではないかなと。やるのであれば、私はそこまでやりたい。今は、皆さんご承知のように、いろんな測定器とかなんとかかんとかいっぱいあります。ほんとに危険な野菜なのか、これ大丈夫だよとすぐ分かる世の中になっているんですね。だから、なんかこう、視野をちょっとだけ広げてみれば、意外と大きな青空が見られるのではないかなと。私はまったく何やってもど素人なので、素人的な発想で発言させてもらいました。以上です。

(木元原子力委員) ありがとうございます。それでは、お待たせしました。荒木さんお願いいたします。

【荒木茂信氏のご意見】

(荒木氏) 荒木と申します。六ヶ所の隣で、東北町というのがありますけども、そこで農業をやっております。核燃サイクル施設について、たくさんの勉強をできる限りやってまいりました。今日、この場において、委員の皆さん方やその関係者に対しまして、揚げ足を取るような部分がもし出てきたら、それは本意ではございませんのでお許しを願いたいと思います。いくら勉強をしてみましたが、18年間こういうことに関わってまいりました。もう少しで20歳になろうかなというところでございます。その中で分かったことというのは、訳の分からないことが分かったんです。まず、その18年前に、当事者から説明を受けた内容というのは、「最新の技術です。」と言っていました。今から、18年前、私が説明を受けたのが18年前です。その時も今も最新の技術だという。でも、中身を見ると、ほとんど変わってないように私は感じているんです。その拳句に、バケツの中でピカッと光ったというようなことで、ちょっとシャレにならないのではないかと、その後始末に雑巾を使うというのは、本当に最新の技術なのかなという風を感じております。ですから、六ヶ所の再処理工場には事前にたくさんの雑巾だとか、ブルーシートを用意しているのかなと私は思っております。その次に、体制についてですけれども、日本原燃さんとかに行ってみますと、そろそろやっとな担当者の名前と顔が一致しはじめたかなと思うと、替わってるんです。その中身をよくよく見たら、2、3年どころか替わるみたいなんですよ。そうすると、私たち、いつまで経っても答えを見出すことができないんです。当然、優秀な人間たちばかりいると思いますけれども、いくら優秀な人間でもころころ替わられたんじゃ、覚える間がないだろうということにもなるかなと思っております。そうするとですね、退職してしまったら、誰も、何にも知らないで、何にも責任を取ることもなくて、そのまま終わっちゃうわけです。結局、つまるところ、出向先の仕事が多かったのか、出向前の仕事の方かと訳わかんなくなってしまうのではないかとこう思っております。中身については、後ほど

し時間があれば具体的に話をしたいと思います。その次に、「技術は確立されております、大丈夫です。」と何度も聞きました。そしてその中で、「原発でもトラブルがあれば、自動的に停止するシステムになっております。」という風な説明も受けました。しかし、多くの新聞に書いてあるトラブルなどでは、ほとんどが自動停止ではなく手動停止です。その辺のところ、よく考えてみていただきたいと思います。それだけの立派なシステムであれば、手動停止なんて本来ありえないですよ。それから、半減期というのは、曲者だと。二万年経って半分ですから。読んで字のごとくだと思います。無くなるわけではないんだということも覚えておいてほしいかなと思います。ステンレスは非常に丈夫な金属でございますけれども、熱に非常に弱いんだというようなことです。熱にさらされ続けると非常にもろくなります。それが一体何年もつのかという風なことも、私一番気になっているところでございますし、それから、コストの問題が出てまいりましたけれども、原発の発電コストは、他の発電に比べて一番安いんだという風に言われてまいりました。だからですね、世界で一番、高い電気料金を払っているんだなあとは私はこう思っております。そして、再処理して、さらに高い電気料金にしてくれるのかなあという風なことであれば、私はそのときまで、十分にお金用意しておかなきゃいけないかなとこう思っております。全体としてですね、情報隠し、事故隠し、その度に何人ものトップたちが、責任あるトップたちが頭を下げてまいりました。これは18年前も今も変わっておりません。つい最近もそうです。「安全です、安心です、信じなさい。」と言われるが、信じる者は皆だまされるわけですよ。何回もだまされました。ですから、そういうことも含めて、考えていただきたい。そして、民意というものはないと思います。この青森県に受け入れを決めたとき、たくさんの人から聞きましたとか、民間からも聞きましたと言われましたけれども、少なくとも私の周りにも、もちろん私自身にも、その関係者たちに意見を聴かれた覚えがございません。ですから、どこでどういう風に民意を拾ったのかなという風な部分でも、非常に疑問を抱いているところでございます。以上です。

(木元原子力委員) はい、ありがとうございました。芦野さんよろしく願いいたします。

【芦野英子氏のご意見】

(芦野氏) 芦野でございます。よろしく願いいたします。昭和37年から平成12年までの長期計画を見ましても、あくまでも国策としてというのが明記されているんですね。それが今、ここに来て、いろいろとこういう場を持たなければいけないということは、やはり国民全体の意見を広く聴いて、出来れば協力してほしいという気持ちの表れだと思って、それは大変いいことだと思っております。今、ここに来て、こういう形で公聴会を開くというこ

とで、私なりに考えたので、私事から申し上げます。原子力の問題に首を突っ込んだのは、オイルショックの時です。石油がなくなったら、それに代わるエネルギーをどうするかという問題が起きて、各地でエネルギー問題懇談会というのができました。私は弘前ですから、弘前のエネルギー問題懇談会に最初から入りまして、それから、色々と勉強しました。ほとんどの日本中の原子力発電所、それに関する企業、施設、研究所、それだけでなく、地熱も火力も風力もほとんど見たと思います。沖縄の海水揚水発電所にも行きました。それでいろいろエネルギーをどうすればいいか、原子力はどうしようか、発電所はどうだっというのを私なりにずっと見てきて考えますと、話飛びますけど、今年の黄砂がひどかったですよ。これは、中国の開発のせいだと思うんです。気候も変わってきました、弘前の桜がでたらめなときに咲いたり、雪が降らなかつたり降ったり、いろいろと気候の変化もありますね。これはやっぱり中国の電源開発の煽りを食っているんだなと私は認識しています。これはまずまずエスカレートすると思うんですね。その中で、一番私が考えているのが、農業っていうか、食料の自給とエネルギーの自給。エネルギーの開発も、農業のこれからのあり方も、環境問題をなくして考えられないということです。そういう観点からいきますと、原子力発電所は、実は、原子力発電所の歴史というのは40年ぐらいあるんですけど、その中で死亡事故があったとか、放射能のおかげで病気になったとかというのは、日本には一例もないんですよ。ただ、いろんな不祥事はありました。でも、これは全て人間がやったことでして、これからもあると思います。安全なものなんてどこもない。道路歩いていても、いきなり殺される時代ですから、車の事故もあるし、殺人もあるし、いろんな問題が山積していますよね。マイナス要因というのはいくらでもあるんです。それと原子力とを比べるのはとんでもない話ですけど、原子力発電所の事故というのは、本当はないんですよ。まあ、何かあった時に、隠したり、嘘ついたり、報告書にでたらめ書いたりというようなことがあったから、信頼を無くしているんだと思うんですけど、それはやっぱり終戦後の人間、日本人の質が落ちたんだと私は思っています。これからもあることですから、やっぱり一番大事なのは教育ですよ。私はある程度科学というものは、ある意味では悪だと思っています。ダイナマイトだってなければ戦争に使うこともなかったでしょうし、でも、平和に使って建設現場では大いに役立っていますよね。それと同じで原子力にある程度科学を信じれば、そういう将来的な希望的観測も出来るんじゃないか、是非その希望的観測を伸ばしてですね、人間の英知をそっちのほうに向けてほしい。それに携わる人や国は、あくまでも安全なことを目的として管理をしていただきたいと思います。青森県の県民のひとりとしては一番気がかりなのは、廃棄物の問題ですね。最終処分場が決まらないままに、進めていっていいものだろうか。そっちの点を是非、きちんと決めていただきたいと思います。それは希望しています。この問題は単に青森県だけではなくて、日本の国民全ての人に認識して協力していただかなければいけないこ

とだと思いますので、この仕事に携わっている木元さんをはじめ皆様には、そのご努力をしていただきたいと思います。

(木元原子力委員) ありがとうございます。今、芦野さんのご発言の時に、ちょっと首をかしげた方がいらっしまったので、フォローさせていただいてよろしいでしょうか。原子力発電所で死亡事故がないという意味は、原子力発電所固有の放射線あるいは放射能による被ばくによって亡くなった方がいないという意味ですよね。ですから、先日の美浜3号機2次系配管の蒸気噴出事故は放射能による事故とは違う。JCOの場合は発電所ではなく燃料を作るところで、あれは当事者の方々が、自分たちが臨界が起きるということを知っていなかったという当事者意識が問題だろうという気がしております。ご説明させていただきました。

【ご意見を伺った方々との質疑応答】

(木元原子力委員) 今、一通りお話をうかがいました。あと、お一人5分ずつぐらい時間があるんですけども、委員側から今のご発言に対して、もうちょっとそのお考えを深く知りたいというご質問がありましたらお受けしますけれども、いかがでしょうか。吉岡委員。

(吉岡委員) 今日はお越し頂きありがとうございます。一点、二、三の方にお伺いしたいんですけども、まず、前置きから入りますと、地方分権一括法というのが成立いたしましたして、中央政府と地方自治体の関係は、対等の関係になったわけです。それと、時期を大体同じくして国家の規制の合理化が進んで、電力自由化が非常に進むという形になって、基本的に営業の自由であり企業の自由であるということになった。電力会社も基本的に対等の立場で、国や自治体と関わるという関係になっている。あるいは、少なくとも法の下ではそうなりつつあると私は認識しております。その三者の関係をこれからどうするかということですが、今までは国の比重が非常に強くて、リーダーシップが強かったわけですけど、これからどうするのかというのが問題になってくると思います。私たち原子力委員会新計画策定会議は国策を決めているわけですけども、国策というのは、企業の営業方針とか自治体の政策と基本的に対等なものだと思っております。国はお金を持っていますから、影響力は大きいですけど、法の下では、対等なものだと認識しております。

本題に入りますと、安全協定について三笠さんたちが問題にされて、安全協定を結ばなければ動かない、運転できないという文脈でおっしゃいましたけれども、隣の二本柳さんは、日本原燃が再処理工場を安全に運転してほしいという風におっしゃっておられる。これは、重要なポイントだと思います。それでは安全協定に関して、青森県なり六ヶ所村は一体何ができるのかということですけど、公害防止協定というのが、最近の判例では法的拘束力があるという風に認識されている。違反したらそれに定められた罰則、例えば業務の差し止めと

か損害賠償とかをやらなければならんとか、そういう内容になってきている。それを履行しなければならぬということになっていると思うんです。自治体としては、紳士協定ではなく、明確にそういう罰則とか廃止命令とか、そういうものを出せるような形に強化していくというのはひとつの選択肢である。違反の取扱いについて自治体は外国からも含めて専門家をいろんなところから雇うことはできると思う。そういうアイデアもありうると思うんですけど、安全協定というものが一体今後どのようにされていったらいいのかということをお聞きしたい。

(木元原子力委員) 分かりました。では一言ずつ。安全協定とはどうあるべきだと思いますか。

(三笠氏) 安全協定、私は、基本的に、青森県が受け入れないといったら、動かないと信じていましたけれども、違うのでしょうか。

(木元原子力委員) 二本柳さん。

(二本柳氏) 安全協定は実際必要で、操業するようになって、こういうペナルティっていうかそういうのをきちんとかけていただくように、そういう法というかケアを作っていただきたいというのは事実です。

(木元原子力委員) では、吉岡委員もおっしゃいましたが、罰則規定をきちんと設けるという意味を含めてお伺いします。呷さん。

(呷氏) 今、おっしゃってる安全協定というのは、ウラン試験についてのことだと思います。私は安全協定以前の問題だと思うんですね。再処理工場を動かす必要性があるのか。今、急いで動かさなければならぬのかということに対して、まったく理解できないんですね。だから、専門家なのかなんなのかさっぱり私は見えてこない。まず、その安全協定の中身がどうだという話の前にそこですよ。再処理が今、なんで日本で必要なのか。なんで、急がなければならないのか。フランス、イギリスにやってもらった40トンをまず使ったらいいでしょという話です。小学生でも多分この辺はもうちょっと簡単に理解すると思うのですが、基本的なところがまず理解できないくらいのレベルの議論をしてるんだと思います。だから、安全協定の話に入るということはもっての他だと思っています。

(木元原子力委員) そうすると、再処理をもしやるならば、日本でやらないで、やるとしても外国でやった方がいいということですか。

(呷氏) まず国民的議論が必要だと思うんですね。電気料金が安いから原発がいいという話も、国民がそう選択したというのがあるのかどうか。再処理するとひと家庭で何百円、千円しない値段でちょっとあがるだけだという新聞の書き方をしてみましたけれども、千円ぐらい上がっていいのであれば、例えば風力とか太陽光などをやってほしいという人がいるかもしれないし、そういう問いかけを国民にしたことがあるかということ、ごく一部の方が国民に

問うこともなく、原発が安いからいいんだって決め付けて原子力政策を始めたように思っています。

(木元原子力委員) 全てが国民に届いていないと。では、ウラン試験で安全協定を結ぶ結ばないという話についてはいかがですか。木村さん。

(木村氏) 何かをやるためには絶対必要ですよ。ただ、必要だということです。

(木元原子力委員) 協定を結んでおかしいことあると困るから罰則規定まで設けると。

(木村氏) そういう二者択一ではなくというのが私の意見です。無責任だといえば無責任だけれど、前に進むためには毅然としたリーダー性も必要だということだと思います。どうすればいいのかと我々にそんな質問をしないで、こうするからどうでしょうかとかですね。どうということ決めればいいんですかと言われてたら、何のためにリーダーになったんですか、何のためになっているのかということまで言うてしまうように私は思います。

(木元原子力委員) では、信ずるから、もっとリーダーシップ発揮しろよ、ということではないでしょうか。

(木村氏) いや、信じるからじゃなくて、信じるしかできないから。この問題はね。

(木元原子力委員) 今、信じてますか。

(木村氏) 何パーセントか。

(木元原子力委員) ということですね。はい。荒木さん。

(荒木氏) 安全協定というのは、先程も言いましたけども、再処理工場を稼働するという前提のもとで結ぶのであれば意味がないと思います。やはりその前段の議論をどれだけしたのかと。多くの国民が、先程舩さんもおっしゃいましたけれども、40トンのプルトニウムがあるということを誰が知っているのか。それは大事なことですよ。数字というのは、多くの人に一番分かりやすいことですよね。そういうこともおおびらに公表していない。知っている人だけが知っていて、なんか聴かれたら本棚の奥から資料をごそごと探り出すような言い方なんですよね。だから、結局、その他のことについても、情報は隠していませんというわけです。その聴くすべをしらない、その引き出し方をしらない人たちは、永遠に知らないわけですよ。ですから、そういう安全協定以前の問題ですよ。安全協定自体を県知事なり小泉さんがどれだけ知っているのかという風なことにもなるわけですよ。まあ、その代わりに皆さんが原子力委員会の皆さんが一生懸命、侃々諤々やってらっしゃるんでしょうけれど。とにかく、安全協定というのは、動くことを事前に想定していることであれば無駄だと思います。とにかく、安全協定をやる前に、その前のいろんな情報をもっともっと分かりやすく提示してくださいということでございます。

(木元原子力委員) はい、ありがとうございました。広く、安全協定の話から、知りたい情報はどうやったら手に入るんだろうか、あるいは、届いていないということの実態が見えて

きたような気がしますけども。安全協定は、今回の場合は、県と事業者とお話し合いをなさるとのことだと思います。では、芦野さん。

(芦野氏)安全が保たれなくて、一番困るのは、事業者であり、そこで働く人たちです。やはり、いろんな取り決めは必要だと思います。しかし、先程、前の方が言われたように、発電所いらない、サイクルいらないって話に戻ってしまうとどうでしょう。私がまだ10代のころに原子力発電所ができたんですね。私はそのころは知りませんでした。クローズアップされたのはオイルショックの時だったと思います。その時に、40年遡って廃棄物のことなんかを誰も考えてきちんとしたことを決めなかったから、40年、50年後の今がごたごたしているのであって、やはりそういうことは二度と繰り返さないように、決めるべきものはきちんと決めなければいけないと思うんです。それで、核燃料サイクルがなぜ必要かという、もうすでに原子力発電所からいろんな放射性廃棄物が出てきているんですね。長い年数経って。今、もうストップしなきゃならないような原子炉もあるわけですから、どんどん出てくるわけですよ、近い将来。それをやはり野放しに出来ないから、こういう施設が必要だと私は認識しているんです。その中で出来たものをどういう風に有効利用するか、どういう風な廃棄物処理をするか、それが青森県で引き受けている原燃さんの仕事だと思うんです。だから、そういうものに理解を示しながら、青森県はやっぱり発信地として、日本中に言葉を発していく必要があるし、それを受け止めて見守っていく必要があると。すでにあるものをうちはいらないと他所に投げるわけにはいかないですから。それを国民全体のものとして、もっと視野を広げて責任を感じているところです。ですから、ずっと遡って、あれもこれもいらない、俺はいやだっていう議論になってしまうと、何もなしでしょ。そこをもう一回、前の方にお考えいただきたいというのは、今の答えにはなっていませんけど、感想です。

(木元原子力委員) ひととおり吉岡さんの質問にお答えいただきました。はい、笹岡委員。
(笹岡委員) 笹岡でございます。荒木さんにお伺いしたいと思います。ひとつはですね、何事にも光と影があると、それが日本全体の光と影なのか、それとも地域にとっての光と影なのか。それから、二本柳さんがおっしゃっていましたが、全てにやはり歴史があるということだと思います。私は電力労働組合の役員をやっておりますが、私ども昭和20年代に電源ストライキをやりまして、大変国民にご迷惑をかけました。その結果ですね、私どもは今、国民の皆様方に停電させないこと、これを守っていかなければいけないんだということで、核燃料サイクルをまわすこともそのひとつでございます。当然、電力会社はですね、原子力発電所の設備を作って売っている会社ではございません。電気を売っている会社です。ですから、一番安い方法で、発電ができればそれにやはり乗り換えると思います。先程自然エネルギーの話されておりましたけれども、具体的に自然エネルギーは、これを私どもは是

非やるべきだという風に思っております。しかし、具体的に数字で申しますと、原子力発電所一基は年間約7500時間運転できます。風力は2000時間です。太陽光は1000時間です。そうすると同じぐらいのキロワットアワーを発生するには、例えば、風力発電所の場合、原子力発電所138万キロぐらいの発電所と同じようなキロワットアワーを発電するには琵琶湖と同じ面積に風力発電所を作らなければなりません。それから太陽光ですが、一台が3キロワットぐらいの発電でございますけれども、これを原子力発電所一基と同様にやるとしますと、愛知県の全部の家庭262万世帯の屋根に乗っけないと同じ発電ができないんですね。すなわち、私たち労働組合は電気を国民に安定的に供給する責務をもっているという風に考えております。そういうことで荒木さんに質問したいのは、先程、2番目に担当者がころころ移動して、いつもやむやにされているというお話がありました。それは具体的に後ほど伺いしたいと思っておりますけれども、今、日本原燃はですね、約2000名の方が働いております。その中で、1000名以上は青森県出身の方です。これからも青森県出身の方をどんどん採用していくでしょう。そういう人たちが偉くなりますから。その青森の人たちは他に異動しませんから、日本原燃ですべて働いていただくと、こういうことになると思うんです。今は、20年の歴史の中で、まだ、一番年配の方でも40半ばです。そういう状況でございますので、具体的にさっきおっしゃられた、うやむやにされた、具体的な例をできればお聞きしたいと思います。

(木元原子力委員) どうでしょうか。荒木さん。

(荒木氏) ちょっと抽象的で失礼に当たるかとは思いますが、お話を聴けば、「私は担当ではございません。担当ではないので、これには答えられません。後ほど担当から聞いてお答えします。」という風な答え方でございます。早くて2、3ヶ月、遅くて半年ぐらい、受け取るほうも「あれ、こんなことやってたっけ」というようなこともございました。私の仲間がそういう思いをしたという風なことを聞きましたし、私自身もそうです。それから、特に4月、年度当初ということになれば、まだ、担当が替わって間もないものですから、「どこから来たの」と言えば、「あの、関電からきました。」とか「東電からきました。」とか、申し訳なさそうに言っておられる方が何人かございました。先程、笹岡委員のご指摘のように、確かに青森県から約1500名の採用をしておられるわけですが、いかにせん採用しはじめてからまだ日も浅いということも聞いておりますし、私たちが雁首そろえて、日本原燃さんに出向いたときには、対応される方はほとんどが恐らく出向してきた管理職の方でございます。いずれにしても、最後には、「今はちょっと発言を控えさせていただきます。」ということになるわけです。私たちが作成した申し入れ書なり質問書を置いて帰るんですけども、最近結構早くなりましたけれども、私のぼやきを通じたのかどうか分かりませんが、そういうような現状でございます。

(木元原子力委員) はい。末永委員。

(末永委員) 6人の方ありがとうございました。桁さんでしたでしょうか、日本の原子力政策が従来、俗に言うトイレなきマンションだったというようなことを言われました。私も基本的にいわゆるトイレなきマンション説というのは賛成です。従来、ようするに原子力発電所を作ることだけに、汲々としてきたというのは、確かにかつてあったと思います。現在、新しい長計を作ろうとしているわけですがけれども、第6次長計以降、再処理というものを資源のセキュリティの問題などいろんな視点から、20年以上に渡って、まさにトイレの部分というのはあれですがけれども、政策を展開してきているわけです。その点はどうお考えかということをお聞かせいただきたいと思います。

それから、第二番目として、荒木さんにちょっとお聞きしたいのですが、恐らくJCOのことだと思いますけれども、バケツと雑巾という大変ショッキングなことを言われました。そして日本原燃もこの18年間以上に渡って、最新技術、最新技術といってもですね、まったく変わらないじゃないかという風なことをおっしゃいました。JCOの問題と日本原燃の問題がですね、どういった形で、両者を同じあるいは、違う風に見ているかをお聞かせくださいというのが荒木さんに対するご質問です。

もうひとつ、三笠さんに対してお聞きしたいんですが、ラ・アージュの主婦などいろんな方のお話を聞いたと、その中でラ・アージュの苦しみというのもよく分かったと最後の方でおっしゃってましたけれど、その辺もう少し具体的なものがあれば、ちょっとさらに情報としてお聞かせいただきたいと思います。

それから、二本柳さんにお聞きしたいのですが、非常に実は私も歴史が大好きで、青森県にきてから、青森県の歴史を調べました。そんな中で、正に、国策に協力して裏切られているっていう、それはもう戦前からそうなんですが、まあ、戦後においてはですね、さっきおっしゃった、ビートの問題、フジ精糖問題、製鉄問題などいろいろありました。その中で、特に六ヶ所村というのは翻弄されてきたと思うんですが、そういう中において、今はとりあえず、いわゆる国策、ナショナルプロジェクトとして、再処理を中心とする原子燃料サイクルが現実の事業として動いていますが、仮にこれがですね、仮にストップなり、あるいは違う方向へいったら、二本柳さんの場合は六ヶ所住民として、あるいは下北の県民のひとりとして、どのようなお考えを持つかその辺ちょっとお聞かせいただければと思います。

(木元原子力委員) はい、では、桁さんからお願いします。

(桁氏) その処分地がどうなるかというのは、私の方が聞きたいことで、サイクルという言葉を使ってるみたいに、全部ぐるっと回らなければならないことなんですよ。どっかで糞づまりしても困るわけですよ。ですから、本来、処分も含めて同時並行で開発というかそれも進めなければならないのに、こちらもまるで見えてこない。処分地の場所を決めるのさえ、

本気で探す気があるのかも見えてこない。ですから、私は逆にあなた方、処分地をどう考えているのかを聞きたい。今日、新計画策定会議構成員の名簿をもらって、見たわけですけど、その末永さんが青森大学総合研究所所長ってということで、唯一、青森県の声が届けるひとりの委員だなんて今、気がついたわけですけど。

(末永委員)あくまでこれ個人の代表ですから。個人という形でしか出ておりませんので、それは誤解なく、現職委員の方々みんなそうだと思います。

(昀氏)是非その、青森県民の8割が不安を感じているということ、県を代表して、個人の意見として、皆さんに伝えていただきたいと思います。

(末永委員)伴委員が盛んに言っております。

(昀氏)青森県じゃない方も、なんか言ってくれてるみたいです。どうもありがとうございます。

(末永委員)私をご質問したのは、要するに20年来長計の中で、再処理路線というものを基本的に位置づけてきたことをどう評価されますかということなんです。

(昀氏)いや、まったく評価してません。

(木元原子力委員)それでは次に、荒木さん、お願いします。

(荒木氏)先ほど、バケツを持ち出したんですけど、バケツ、雑巾、別に掃除するわけじゃないですけども。最新の技術だ、最新の技術だというのは、私が言ったわけじゃなくて、当時の推進側の意見でした。説明する際にはもちろん、差しで説明するわけではなくて、何十人もいた中で、「最新の技術でやります。絶対大丈夫です。」と言うわけです。でも、どんな技術でも、隣の芦野さんが言っておられましたように、どんな技術でもですね、やはり完全なものはないんですよ、最新だろうが、最新でなかりょうが。そして、人間というのは、みんな不確実なものですから、必ず間違いがあるわけです。絶対に大丈夫ですとか、なんでそんな風に言うんだらうと思うんです。こういうことも危ないと思います、だから、気をつけてやりますとか、ほとんどそういう話を聴かないんです。隣の木村さんがおっしゃられたようにプラスとマイナスがあるんだよ、こういうプラスもあるけど、こういうマイナスもあります、やっぱりそれは正直に言ってほしいと思います。それを言わないから、余計な不信を生むんだと思います。ですから、私が表立って、反対運動をするというのは、同じ農家として不安なんです。さっきも言いましたけれども、いくら勉強しても分からないんです。そして、聴けば聴くほど、こういうこともありましたって小出しをするんです。そういうやり方、ある意味では姑息なやり方というのはやめていただきたい。この間も、コストについて、10何年も前から隠してたとか、どっかのダンボール箱の中に入っていたような言い方をされています。誠実さがありません。誠実さがなければ、私たちは安心できないんですよ。安心できないから、分からない。だから、反対する。

(木元原子力委員) はい。では三笠さん、お願いします。

(三笠氏) 先程お話ししたのは、ラ・アーク周辺に住む「怒れる母親たちの会」というメンバー4人が3年前、グリーンピースジャパンの企画でしたけれども、日本に来て、お話を青森でも4箇所で行きました。この会は、1996年のピエル教授による疫学調査研修論文でラ・アーク周辺の若年層における白血病およびその増加と海が関係あるという論文が発表されたときに、びっくりしてお母さんたちが集まってできた会で、現在60人ほどがメンバーで、署名運動などを行っているようです。そのときの具体的な話をすれば、イレーヌという漁師の奥さんがいらっしたんですけれども、まず、ご主人が漁師なんで、食卓に魚がよくのぼるわけなんですけれども、「湾内で捕れた魚は子供たちには食べさせられない。気休めだとは分かっているんだけど、海で遊ぶときには、潜水服を着せているんだよ。」とおっしゃっておられました。その方に家に泊まっていたいて、ゆっくりお話する機会があって、海岸線をお見せすることができたんですけれども、「ほんとにきれいだね。でも、動く前に止めなきゃ。あなたたちは私たちよりずっと魚とか魚介類食べるでしょ。私たちよりもっと早く被害が出てくるんじゃないの。」と言われたんです。その会のリーダーであるナタリーという方は、距離にすれば30キロぐらい工場から離れたちよど湾の対岸のところで、レストラン兼ペンションを営んでおられたそうですけれども、そこも風評被害というか、客足が遠のいて閉めざるを得なかったとうかがいました。実はそのさらに3年前、つまり6年前になるんですけれども、そのお母さんたちの呼びかけでラ・アークに行ってきました。そのときは、フランス以外の再処理周辺に住む母親たちとお話がしたいということで、セラフィールドからもいらっしたんですけれども、彼女の息子さんは12歳で白血病にかかり、彼女自身も甲状腺を病んでました。今、コアというグループで一生懸命やってらっしゃるんですけれども、反対運動をされています。実際に自分で見てきて、推進されている方もたくさんいてらっしゃるんですけれども、あまりの意見の食い違いというか、同じところを見てきたはずなのに、全然違うことを聴いてきたわけです。そのギャップをどう埋めていいか、私自身、分からないんです。

(木元原子力委員) はい、では二本柳さん、お願いします。

(二本柳氏) 下北開発、また、再処理工場が中止になればどうなるのかということですよ。中止になれば、開発以前の貧しい地域でしかないでしょう。私たちはどうしても進めたいということと、私たちは、六ヶ所なり下北半島におりまして、エネルギー政策に協力しているんですけれども、エネルギー政策について、いろいろ勉強しているうちに、やっぱりこれは地域だけのことでなくて、国策ですね、国の政策による原子力政策であれば、やはりそれを推し進めていかなくてはならないと思います。私たちは女性団体のグループとしてやはり原子力について放射線についていろいろな勉強をしております。やはりそういう

知識を持ってあたらなければならないと思います。現在の国のエネルギー事情としては再処理工場を進めていただくのが、国策としても沿っていますし、私たちの願いでもあります。

(木元原子力委員) はい、よろしいですか。ありがとうございました。伴委員、お待たせいたしました。

(伴委員) 先程、芦野さんから、最終処分場が決まらないままに、原子力が進められてきたが、それでよいのかという疑問符が少し出されました。どこの国でも、最終処分場が決まらないままで、ここまでやってきているわけですが、そのこういう政策の進め方について、皆さんにお伺いしたいんですが、原子力政策の進め方についてどういう風な印象を持っていますかということ。それから何人かの方から、まだ理解ができていないと。木元さんは先程、知りたい情報が届いてないという風にまとめられましたが、ではその理解ができていない、安全協定前段の議論がまだできていないというその意見について、どのように進めていけば、より議論が深まるのかという方法ということですかね、そういったものについて、2点になるんですが、意見がある方は是非述べてください。

(木元原子力委員) では、荒木さんからお願いします。

(荒木氏) 原子力政策について、発言させていただきます。原子力政策は、既存のものだけということに限定すれば別に問題はないです。ただ、実際、私たちの目の前に来るいろんな当事者を含めて、推進側の人たちが言うことは、必要論を言うんです。私もエネルギーは不必要だとは思ってはいません。むしろ、私も皆さんと同じように必要論はもちろん持っています。しかし、それ以上に、危なそう。だから、私たちは安全性をその推進の側の人たちに求めるわけです。向こうは必要論とそれから交付金とか交付税だとかそういうお金の話をしてくるわけです。ステージが違うわけです。そこに問題があると思います。一般的にうまい話には気をつけるとよく言いますが、ほんとにばら色のことしか書いてないわけです。先程も言いましたけれども、こういうことをやれば、こういう羽目になるかもしれないと、その可能性すら否定するわけですよ。日本では絶対事故は起きないんだと。でも、たまたま起きてないだけだと感じたほうがよろしいかと思うし、どうしてその素の部分の懐の中に入れちゃうのかなと思います。それから、先程、今やめると大変だというご意見もございましたけれども、やはり、登山に行ったときに、頂上の天気が悪かったら、やはり途中で戻らなければだめですよ。そういう戻る勇気をですね、やはりみんな考えていった方がよろしいかと思います。それで、大体無理をして遭難しちゃうとかやってるわけですよ。だから、撤退する、立ち止まる、ちょっと後ろを振り返ってみる、もっともっとそういうスタンスで、これから考えてほしいなというのが実感です。

(木元原子力委員) はい、三笠さん、お願いします。

(三笠氏) 政策のあり方、進め方ということなんですけれども、先程桁さんの方からちょっ

と出ておりましたけれども、核燃サイクルってサイクルがもうすでに破綻している。そのことについてきちんと今日の場合でも説明がないわけなんですけれども、高速増殖炉もんじゅが火災事故を起こして止まっています。この前、高等裁で国の全面敗訴でした。今、上告しているらしいですけれど、それに世界的にも、高速増殖炉はフランスでさえ撤退しようとしています。その代わりと考えられたプルサーマル。これも、MOX燃料のデータ捏造とか、刈羽村の住民投票とかで止まった状態です。それとあと、最初の計画から世界的な状況が違っている。まず、ウランの価格がかなり安くなっていますよね。1978年に42ドルだったものが、今年は19ドルだそうです。核拡散防止の流れで、大量のプルトニウムは持てないことになっていますから、その点から言っても、どうして再処理がやれるのか、どうしても理解できません。また、政策の進め方ということですが、原燃とか県主催の説明会は確かにあります。しかし、いつやりますという発表は大体やる1週間か2週間前、そして、やるのはほとんど平日の日中です。行きたくても行けないんですよ。私たち仕事を休んでいかなきゃならないんですよ。原燃の方たちは時間内に給料もらって見えるんですけども、私たちは仕事を休んで行っているんですよ。そういう状況を見て、どうしても主催者の都合のみ優先されていると感じざるを得ません。それと、そうやって行われた説明会で原燃、県側が説明しましたとおっしゃいますけれども、それをイコール、理解していただきましたと勝手に解釈されているんですよ。私たちは、その場で質問何点かしたりしますけれども、理解しましたっていうことは一言も言ってないですよ。また、その場で、皆さん分かっていたかということも聴かれませんが、その中で、県民の意思が本当に反映しているとはどうしても思えないんですけれども。

(木元原子力委員) そういう時は、質問はできるんですか。

(三笠氏) 決められた時間。前もって紙に書いてだしたのを。こちらが満足できるまでは、時間の制限がありますので。

(木元原子力委員) テレビのように朝まで討論をやっても良いように思いますね。

(三笠氏) 今日、ちょうどいいんじゃないですか。飛行機も出ないですし。

(木元原子力委員) という意見も出てまいりました。はい。芦野さん、何かございますか。

(芦野氏) 今ある原子力発電所の廃棄物はどうなるんでしょうか。元に戻す、引き返せばいいんじゃないかというご意見もありましたけれども、これから発電所を新しくどんどんやれということではないんですよ。ただ、ずっと長い間運転してきた原子力発電所がもうそろそろみんな寿命にきている。そこから出る廃棄物はどうするのかと。コストの問題で、そのまま埋設した場合より、再処理してコンパクトにしたほうがコストが高くなるということですが、この間アメリカの方がいらして、廃棄物の話をした時に、アメリカの場合はそのまま直接埋設するとユッカマウンテンの800キロに及ぶ地下道の埋め地をさらにもう6つ必要だ

というんですね。アメリカは兵器も持っていますから、日本とは比べ物にならないんですけども、もし直接埋設することになれば、そのだっ広い面積をどこに求めるのかという問題も出てくるんですね。そうすると、コストの問題だといっていられなくなるのではないのでしょうか。今、コンパクトな場所さえも確保できないでいるときに、例えば5倍、6倍の面積が必要になってくるような埋設の仕方というのは果たして可能かどうか。それを考えると、コストが1.8倍になっても、より安全なガラスの固体にして地中に埋めた方がいいのではないかという意見も出てくると思いますね。だから、そういうこれからどんどん廃棄物を、発電所を作るということではなく、今ある発電所の始末は私たちの責任で、子供たちに受け継いでいくために、ここで踏みとどまって責任を果たさなければいけない時期だと、個人的に意識しています。ですから、後戻りできないところに来ている問題を抱えていると思っています。

(木元原子力委員) ありがとうございます。木村さん、お願いします。

(木村氏) 確かに今反対されている方たちの意見というかそういう内容というのは、いろんな形で少なくともこの5、6年前から私はそれを知っていました。そういうのを全部ひっくるめた上で、先程から私は発言を繰り返しているんですけども。なぜ、これほどまでに感情的に反感を持つほど反対されているかというのは、多分に原燃なら原燃側の対応のまずさがあったと思うんですよ。潔くないというか、頬かむりして、できれば隠れて。これは原燃さんだけじゃなくて、私自身もひっくるめて、先程、芦野さんおっしゃったけれども、日本人の侍スピリットがかなり低下しているという表れだと思います。

ただそのことはそうとしても、現実には、日本の電力エネルギーの3分の1を担っている原子力発電がぴたっと終わったときに、3分の2はどうなるのかと思います。私が、一番腹立たいのは、どんな小さいところにも、こうこうと明かりをつけている野球場があります。ちょっと覗いてみれば、ほんの数人が数十人がやっているだけなんです。あの電気の無駄遣いというか、ああいう風なものに対しても一緒になってちょっと考えてくれよという方向へ議論をもって行きながら、そして我々、こういうこともやるから、ああいう無駄遣いもさせないから、だから、電気をみんなで大事に使おうよという方向へこそ、この議論を持ってほしいなと思います。

原燃の施設、原発の施設、日本全国あちこち見させてもらいました。こんなところこういう方たちも人知れずがんばっているんだなという方たちがたくさんおられます。青森県人が、六ヶ所で働いています。では、彼らが誇りを持って働いているのか、肩身を狭くして働いているのか、私はやっぱり誇りを持って働けるようなそういう施策、国策、あるいはバックアップ、精神的なバックアップというかそういうものが必要だと思います。100%これ安全なんじゃないんだよとか、そういう風な反対者もたくさんいるんだよという風なことで、

でも、私は今の現実であれば、これを認めざるを得ないんだよなという現実を目をつぶるしかないと思っています。

(木元原子力委員)では、井上委員。

(井上委員)井上と申します。唯一関西からやってきました。人生の中でこの青森県にやってくるってことは、何回あるだろうかと。やっぱり日本は広いですね。そして、私たちは電気のことを語っているわけですけども、先程無駄遣いなりですね、24時間コンビニの明りはついているは、24時間インターネットは使うは、そして、都市ってというのはそういうものなのだという、そういうような元凶のもとところに住んでいるので、今とても木村さんのお話は考えさせられますし、皆さんのお話聞かせていただくチャンスに恵まれたのも大変ラッキーだったと思います。現実、ほんとに大阪ってというのは、ほんと考えたこともない、電気は福井からやってくる、ただそれだけです。使った後のゴミってというか廃棄物どこ行くのって考えたことも多分あまりない、これも現実かと思います。たまたま今日お会いしましたので、そういう、使いたい放題使って、「後のことは知らないよ」、「どっかでなんかやってくれるみたい」、「日本がダメなら、外国があるじゃない」みたいなことに対して、「やっぱりそれは無責任というものでしょう」、「消費者もちゃんと考えていかなきゃいけない」、「知らないで全部押し付けてくる、都市の生活者許せない」など、なんかこうしてほしいとかいうことがありましたら、是非、聞かせてほしいと思います。どなたでも結構です。

(木元原子力委員)呷さん、お手をお挙げになりました。

(呷氏)先程の質問と一緒に答えたいと思います。私がまず国民的議論という部分と国民の合意という部分にこだわるひとつは、原子力政策の場合、安全に思わせるように努力してきたと思うんですね。日本自体が資源がない国だと、これはそうですし、エネルギーは外国に依存しています。電気は3分の1っていう風に言いますが、自動車に使うガソリンなど資源としてみた場合、原子力がエネルギーを占める割合って12%なんですね。結局は、石油に依存して経済が成り立っている日本。日本国民がそれを理解して、何を伝えればいいのかという、その危険性も一緒に説明しなければならないと思うんです。荒木さんが言ったとおりです。これだけ危険だけれども、資源がない、皆さんはどちらを選択しますか。つまり日本国民に覚悟を持たせなければいけないと思うんですね。覚悟を持たせないから、負担を負っている地元の人に対して、消費者が感謝の気持ちがあるかというとならないと思いますよ。私たちには選ぶ権利があるといいますよ、野菜買うときでも。でも、生産者は産地を選ぶことは出来ません。三村知事はその辺理解しているのか、浮かれて「攻めの農林水産業」って言っているんですけども、まず、そのこと。木村さんが言った部分で、日本原燃の人に誇りを持って働いてほしい、私もそう思いますよ、同じ日本人ですよ。やるべきことは、

たくさんあると思います。原子力の専門家、技術者というのは、そういう意味で誤解がないように言っておきたいのは、私は、技術者、専門家というのは、使用済核燃料がある以上、今後も必要だと思っています。ただ、再処理については、今やる必要性というのがまったくないということを、まず伝えておきたいと思います。

(木元原子力委員)ありがとうございました。二本柳さん、どうぞ。

(二本柳氏)私たち、地元におりまして、大消費地の人たちとの交流が度々もたれます。やはり原子力に対するご理解がなくて、現地にいらして、また、現地の私たち住人とひざを交えて、歓談したり、いろいろ施設の原子力の方々のご説明を聞きますと、「はあ、なるほど」と理解される方が非常に多いんですね。消費地にいる方は、「私たちは電力についても非常に考えが浅かった。やはりこれだけ地元の人たちが、原燃の方々が、ご苦労しているんだから、私たちもやっぱり節電しなきゃいけない。」というようなお話があります。やはり現地を訪れ、また、地域の人たちとお話を通じると、非常に理解していただけます。原子力に対して、また、放射線に対して、非常に不安感ばかりが先行しているように思います。六ヶ所の人たちが、原子炉の立地の人たちが、いかに消費者のために努力されていることで、非常に感謝をされたことがあります。そういうものの考え方をする方が非常に多いということをお伝えしたいと思います。

(木元原子力委員)ありがとうございました。井上委員、よろしいですか。笹岡委員、どうぞ。

(笹岡委員)笹岡です。先程ですね、原燃で働くものが生き生きできるようにご理解いただいたということ、非常にありがたいと思います。先程お話ありましたように、日本原燃は、若い人を含めて、再処理するために入社していますので、先程、戻る勇気も必要だとお話されましたけれど、進む勇気も必要だと私は思っております。是非、進めていただいて、最初に入社した人はもう20年前に入社しているわけですから、その人たちが再処理をできるようなことをやっていただいて、より活性化していくんじゃないかこのように思っておりますし、最終的には青森県の人で全て運転できると思います。そういう体制になると思いますので、是非、そういうご理解とご協力いただきたいという風に思います。

(木元原子力委員)あと30分ぐらい欲しい気がしています。よろしいでしょうか。実は、会場から意見をこれからうかがいたいからです。今お聞きになっているのご意見など、端的に2分ぐらいにまとめてお話いただきたいと思います。お手をお挙げいただきます。そして私が指名いたします。そうしましたら、お近くのマイクの前で、お名前とそれからどちらからいらしたか恐縮ですけれども、一言おっしゃっていただいて、ご発言いただければと思います。はい、どうぞ。お名前と、どこからいらしたかおっしゃってください。

(タネイチ氏)六ヶ所村から参りましたタネイチと申します。私は次世代を担う地域の一人

として、原子燃料サイクル事業について最大限理解を示すものでありまして、また、商工会組織を通じて、多くの仲間たちとより一層知識を高めて、より深く理解をしようという努力をしている者のひとりでございます。これまでの原子力業界に置いては、JCO、そしてデータ改ざん、トラブル隠しと、一般社会では到底考えられない倫理観のずれから生じた事故やトラブルが多々あったかと記憶いたしておりますが、これらはいずれも、原子力自体やっかいものに扱われながら、なおかつ、原爆アレルギーなど、他の技術社会とは比較にならないほど、特異な扱われ方をしてきたからではないかと私自身考えております。しかしながら、今般の国内のエネルギー保障問題等を考えますと、原油が60ドル近くも高騰している中で、安定したエネルギーが確保されていること自体、原子力の存在に他ならないという風に考えております。当然そこにおいてはコストの問題等議論する価値はあろうかと思いますが、逆にコストありきで、その必要性が議論されていることに私はいささか疑問を感じています。いずれにいたしましても、その必要性自体が十分議論されており、民主社会においてはある程度、国民の理解が得られているものではないでしょうか。地域といたしましても、これまでの村民、ひいては県民の努力の報われるような、原子力政策、原子力長計であってほしいと切に念ずる次第です。今後の再処理工場の一日も早い稼動と、関係ご当局の更なるご尽力をご期待申し上げて発言といたします。ありがとうございました。

(木元原子力委員)ありがとうございました。はい、手をあげられた後ろの方、どうぞ。

(マツシマ氏)原燃から10キロほど離れているところで農業やっております野辺地町のマツシマというものです。私は核燃に反対している者です。なぜ、反対するかというと、まず、核燃事業をやること、そして、原子力発電を続けていくことによって、どうしても自然放射能というのが少しずつでも、事故がなくても出るということ、電力会社は安全だと言っているんですけど、しかし、長い年月を考えて見れば、やはり積もり積もっていけば、害になっていくということ。そして、人間が生きていくためには農業や漁業や食料を生産するということが一番大切であり、その自然環境がよくなければ、よい食料は生産されない。ところが原発や核燃で汚染されていけば、その地域で取れる作物は、やはり人の安全性を損なうものしか取れなくなれば、生産できなくなるし、売れなくなる、風評被害も当然出てくる。こういうようなことになっていけば、大変なことになりますし、もし事故が起きた場合のことで考えれば、これは狭い日本の国において、チェルノブイリの原発事故ひとつを考えてみても、あれだけ広範囲に人間の生活する環境が失われていくということ。これからも核燃を進めていく、そして、その前提として安全協定を結ぶ、国策だからというけど、国や電気事業連合会や何かが本当に法的な拘束のある保証人として当然加わって、そして風評被害にしても、もし事故があった時の被害にしても、保証人としてちゃんと責任を持つということ、それから、推進する人たちはただ推進するのではなく、やはり責任をもって、命をかけて、もしな

んか、今まででも事故がたびたびあったけど、私が責任を持ちます、保証しますということ
は出ていないんですね。そして、子孫にその責任を、管理を任せるといような、廃棄物そ
の他を、そのことに良心の呵責を感じないのかと、そういう倫理性はやっぱり人間性が欠如
しているのではないかと。これは今の生活をやっぱり変えていかなければならないのではない
か。長くなってごめんなさい。

(木元原子力委員) ありがとうございます。では、どうぞ。そちらの女性の方。

(フクヤマ氏) 婦人団体でがんばっておりますフクヤマと申します。皆さんのお話を伺い、
今日は大変参考になりました。私も以前は、原燃に対しては本当に印象が悪かったです。なぜ
青森なのか。なぜ、六ヶ所なのか、ということから不信感が沸いてまいりました。そういう
ことで、いろんな勉強しました。いろんなところを見ました。そういう中で、やはり原燃と
いうのはすばらしい会社でありますし、なくてはならない存在ではないかと理解するよう
になりました。そういうことで、むしろこの青森県に来たことを誇りに思うようになったわけ
ですが、前回のプールの水漏れ事故では大変残念で、何をやっているんだということで、憤
りさえ感じました。でも、それに対しての社員の徹底した究明、そして調査、修理、その姿
を見まして、この方々がいるのであればなんとかなるのではないかなという安心感、信頼感
も沸いてまいりました。そして青森県は雇用関係では全国最低でございます。でも、六ヶ所
で先程先生方からお話聞くところに寄りますと、1200人、これは県としましても、六ヶ
所にしましても、雇用関係では絶対無ければならない存在ではないかなとそう考えておりま
す。そういうことで、そこに勤めている社員の方々も、終生の職場として働いていると思
います。どうかその人たちのためにも、継続して、この原燃の事業を推進していただければな
と考えております。以上でございます。

(木元原子力委員) ありがとうございます。こちらの方、どうぞ。

(キュウデン氏) 私は六ヶ所から40キロほど離れております六戸から参りましたキュウデ
ンといいます。14, 5年前に青森県の農業士会で反対運動もしました。ここにおられる方
とも一緒にやったり、いろいろなことをしました。そういう中で、今の議論はまさに当時と
そんなに変わった議論ではないんですけども、反対運動している方が話していることもよく
分かります。それに対して皆さんが答えているかということ私はそうでもないかと、隠してい
る部分もあるといわれますが、そのとおりだと思います。ただ、我々が反対運動した中から
生まれてきたのは、会社が誠意を持って青森県民に答えたりいろんなことをしてきました。
それがやはり選挙に負けたりしながらでも、会社は誠意をもって尽くしてきたのではないか
なと思います。それを県民が受け入れた中で、ここしばらくは反対運動もないとは言いませ
んけれども沈黙をしてきていました。ただ、2年後とか3年後にまた再処理が動くというこ
とになってくると、また、好みも出てくるのかなと思います。私はそういう考えを持ってい

ます。そういう中で、共に生きるということがこの原子力とか再処理の中で欠けてきているのではないかと考えています。日本人の考え方の中にはくさいものにはふた、めんどくさいところには行きたくないという姿勢があります。青森県の県民性はあまりものを言いません。そういう中でも、酒飲んだりいろんなことをすると、自分の意見をいっぱい言います。でも、その中で言わないから、会社は来ないんだということがあってはいけないと思います。ちょっと話が違いますが、いろんな団体やいろんな会社がいっぱいある中で、4分の1でも、5分の1でもその人たちのことを聞いているんでしょうかと。特にそういうところ、もう一度原点に立ち戻ってですね、地域と共生できる会社であってほしい。特に委員の方々も、原子力の中では地域と共生できないと必ず反対運動がおきるということを、頭に入れてやっていただきたい。それは特に再処理という問題に対しては、今までにないぐらい地域と共生をしながら、隣接、隣隣接、青森県全体の理解を得て、そして国民の理解を得ていかなければならないなと思います。私も地域で農業をやりながら、消費者の皆さんも、消費地の皆さんも我々を案じて結構ものを買ってもらえます。いろんな努力をしてきている中で、地域の農業も消費者がかわいがってくれるようになってきました。地域で会社の人たちがもう一度原点に立ち戻って、県民や国民に向かって自分たちが努力するべきではないだろうかと思っています。

(木元原子力委員) はい、ありがとうございました。先ほどからお声があがっていた方どうぞ。

(タネイチ氏) 先程、六ヶ所から発言者でタネイチさんという方も見えておりますけれども、私も六ヶ所からきました同じタネイチと申します。しかし、先程のタネイチさんは賛成。私は反対の立場のタネイチでございます。よろしく願いいたします。そして、私は、六ヶ所の村民ではありますが、一国民として、原子力の委員の皆さんに是非ご回答をお願いしたいと思います。第一点はなぜ近藤駿介委員長はこの会場に来なかったのか。これは青森県を愚弄しているのではないかと、この一点に抗議する六ヶ所村のタネイチでございます。それから、今、論されていますけれども、平成5年、6年約10年前に、試算隠しの件が、明らかになっていたならば、今日のような論はされていない、あるいは六ヶ所村に核燃料施設が来なかったのではないかとそのようなことも感じている次第です。やはりこの論をする前に10年先に遡ってですよ。10年と申しまして、5年、あるいは3年を凍結といいますが、ゆっくりした時間を置いて、検討していただきたいと思います。国民の意見を聴かず、市町村の長の意見ばかりをどちらかというように聴いているような感じがします。やはり、私も、六ヶ所の生まれで、今、70になろうとしていますけれども、その大半はこの核燃施設あるいはむつ小川原開発当時から30年、40年とこの運動に携わっているのです。やはりそういう問題から言って、命に関わる問題は是非、委員の皆さんも考えてもらいたい。青森県は札

束ではなく、やはり命の財産を守るのが県の代表者である三村知事でもあるけれども、委員の皆さんは是非、そういう命に関わる問題なので、よくよく考えて急ぐことなく検討をお願いいたします。回答も是非この場でお願いしたいと思います。どうですか。

(木元原子力委員) 回答ということで、近藤委員長の件はまず言っておきますね。近藤駿介委員長は今日国際会議があるんです。これは以前から決まっていたので来られないんです。

(タネイチ氏) では、その重任というのは、近藤さんに次いで齋藤さんですか。

(木元原子力委員) 齋藤委員長代理です。

(タネイチ氏) だから10年前の試算隠しについて発表されているならば。

(木元原子力委員) 試算というのは直接処分するときの費用のことですか。

(タネイチ氏) 10年前に必要なことが開示されているべきである。隠すなといいたいです。

(齋藤委員長代理) 今のコスト計算を隠したという件について申し上げたいと思います。10年ほど前に、OECD/NEAと言っておりますけども、国際的に原子力の先進国の集まった機関で使用済燃料を直接処分した場合と、再処理をしてリサイクルした場合のコスト計算をいたしました。それに習っているいろいろなところが、日本に当てはめたら、土地代とか人件費とかこういうものは、3倍かな5倍かなという仮定を立てて計算をやったわけですが、それはあくまでもその程度の試算でございます。そして、当時は隠すとか隠さないではなくてですね、委員会自体が、現在のように開かれた形ではなかったということであって、隠すとか隠さないという話ではなかったわけでありまして。今、問題になっておりますのは、経済産業省の方で、国会で聴かれたことに対して、そのような試算はまったくやってなかったという誤った答弁をしたということが問題であったということだと思います。

(タネイチ氏) 隠した隠してないって、隠しているから、社民党の福島瑞穂議員に質問されて、この問題が出てきたわけだ。だから、隠したということになってしまう。

(齋藤委員長代理) 私どもの所掌外であります。担当行政庁の経済産業省の担当者が10年前のことを知らなくて、福島瑞穂議員に聞かれたときにございませんと答えて、探したら、10年前のものが出てきたということでございます。

(タネイチ氏) だから、それが明らかであれば、現在のこの論を、今日の間を持たなくてもよかったのではないかということです。

(齋藤委員長代理) それは今、我々議論しているところでございまして、直接処分の方がコスト的にはちょっと安いということではありますが、全体的に先程事務局がご説明いたしましたけれども、核燃料サイクルは、コストだけではなく、国のエネルギーセキュリティとか、地球環境の問題とか、そういうことを考えて総合的に判断をしなければいけないということでもあります。

(木元原子力委員) 新計画策定会議では、今日の資料にもありますけれども、核燃料サイク

ルが今問題になっているので、これからはじめました。来年の秋までに原子力の新しい計画を策定します。まず、4つのシナリオを想定しました。今までのシナリオと、六ヶ所再処理工場をまず稼働させて処理をし、残りは直接処分するというのが2つ目のシナリオで、それから3つ目のシナリオというのは、核燃サイクルやめると、全部直接処分にするというそういうシナリオ、4つ目は当面、中間貯蔵し、適切な時期に、再処理か直接処分か決める。

(タネイチ氏) あなたたちは4つのシナリオと言いますが、論であれば、やるかやらないという論をしているんですよ。委員としてですよ、4つの中でなんとかなんとかってそういうことではないと思いますよ。

(木元原子力委員) ひとつのご意見として承っておきます。でも今、策定委員の皆さんはそれを理解して4つのシナリオを時間をかけて論議しています。申し訳ありませんが、時間です。たくさん手が挙がっていますので、次の方。はい、どうぞ。

(ヤマグチ氏) 今日は六ヶ所村だけの方が発言して申し訳ないなと思っております。私も六ヶ所村の人間でヤマグチと申します。私は振り返ってみますと、幼いころに祖母に連れられて六ヶ所の開拓に入りました。そして、その当時は六ヶ所村には何もありませんでした。野道から20キロ延々と歩いて山道で、当然道路もなし、電気もなし、水道も何もない、そういうところにランプ生活で何年も暮らしていました。そして、その当時の仲間がどんどん離農していきました。その中で私は酪農に活路を見出して、個人的には今も酪農で食べております。そして、娘が青森にある大学に行ったときの祝辞の中に、陸の孤島六ヶ所村という言葉ができました。私はこの言葉を聞いたときに、この核燃サイクルを容認するという立場に変わりました。それまでは、先程どなたかが申し上げたように、私も反対の方で凝り固まっております。しかし、昔の六ヶ所村に戻りたくない、やはり将来を見据えた六ヶ所村にしてほしいとそういう考え方から、私はあえて共存共栄という道を選びました。しかし、今までの輸送容器の製造や東電の様々な虚偽の報告なり、データ改ざんなり、本当に、私はいつも情けなく思っております。私は日本の科学者を信じておりますから、技術的には確立されたとしても、人的安全論がまだまだ不備だと思っております。委員の各位の皆様方には、その人的安全論をもっと強調して対応していただければありがたいなと思っております。それから、もうひとつ、先程、トイレなきマンションという話が出ましたけれども、全国の使用済燃料が六ヶ所村に集まって、そして六ヶ所村で再処理されたその後はどうするのかと、つまり今の考えだとプルサーマルではないのかなと思いますが、プルサーマルも全国でなかなか引き受け手がないという現実があります。そうすると東通にまだ建設中が1基ですが、次に3基を計画中、大間にフルMOX 1基とそうなってくると、これから下北半島に設置されようとしている原発で、この六ヶ所で再生されたものが、ややもすると全部消費しかねない。そうすると原子力の最後のツケとして、下北半島が終着駅になりはしないのかなと個人的に

危惧をしておりますので、その辺にもひとつメスを入れていただければありがたいと思っております。六ヶ所村に特産物はいっぱいあるんですが、その特産物もなかなか思うように生きない。農業者としてそのジレンマはもっております。

(木元原子力委員) ありがとうございます。はい、では、お待たせいたしました。

(ヒラノ氏) 浪岡のヒラノと申します。私どもの要望に沿ってこういう会を開いていただいて感謝をしております。ただ、非常に残念なのは、この資料を見ても分かるように、片方はやたら大きい文字、片方はやたら細かい文字、なぜみんなが読めるような資料を配布してくれないのか。そういう考え方が、やればよいという姿勢にしか伺えなくなっちゃうわけです。そういうことは十分反省をしていただきたい。それから、7時までということまで予定をしてくれている人が、途中で帰るはめになっている人もおります。したがって、会場でこれと一緒に一言でもいいから、意見を書いてくださいという形にすれば、限られた30分に言えなくても、それぞれの方が意見を述べるチャンスがあるはずなんです。そういう配慮もひとつ十分考えていただきたい。それから、非常に多く手が挙がっているように、多くの人がいろんな意見を持っております。したがって立地をしている青森、そして茨城とか新潟とか福井とか、こういう集中立地のような地域には何度でも足を運んで意見を聴いて、最終判断をされるというような配慮を心からお願いしたいと思います。私個人の意見は時間かかっても具合悪いと思って事務局の方にペーパーを出してありますので、後で、原子力委員なり、策定委員の方々、目を通していただければとありがたいと思います。

(木元原子力委員) ありがとうございます。ヒラノさんにはいろいろいいご意見をいただきました。資料ですが、本当にごめんなさい。私も字が小さいと思います。これはA3で作ったものをA4に縮小してしまったんです。申し訳ありませんでした。ご意見をありがとうございました。それから、ご意見はいつでもペーパーで出していただくように、常に原子力委員会は窓を開いていますし、ファックスでもメールでも寄せてください。ホームページに今、この長期計画の策定に対するご意見を載せておりますので、ここを借りてご紹介させていただきます。はい、次の方お待たせしました。

(オサナイ氏) 青森のオサナイといいます。まず、青森県民の8割から9割はほとんどこの核燃に不安とか反対であるということ、そのことはもう委員の皆さんはよくご存知だと思いますが、最初にそれを言っておきたいと思います。反対の立場でいくつか言いたいと思います。ひとつは、ほとんどあまり、六ヶ所の自然というのは省みられない状態できましたけれども、ほんとうにすばらしい、尾駈の干潟とか、そういうところにタカホコシラトリとかそういうものが絶滅していついていくという、自然の生物が絶滅していついていくということを是非、委員の皆さんには考えていただきたいと思います。また、原子力船「むつ」のことを皆さんはきちんと考えていてくださるのかと言いたい。やがて原子力船の時代がくると言っ

て原子力船「むつ」の実験をしました。しかし、原子力船の時代は来たでしょうか。これから来るでしょうか。そこで、私が言いたいのは、核燃サイクル、サイクルといって今、再処理に突っ込もうとしています。しかし、本当にプルトニウムを安全に使えるだけの技術とこのあとどどんとプルトニウムを燃やすという原子力の循環というか、サイクルというのが本当に要望されているのか。そういう時代というのはまもなく来ることはないというのが明らかになると思うんです。というのは皆さんご存知のようにほとんどの県民が要望しているのは、自然にやさしいものであって、エネルギー効率の悪い原子力発電ではないということです。いろんな意味では水素発電や水素電池の時代というのが、本当にこの競争の中ではまもなく来るのではないのでしょうか。この原子力委員の皆さんは本当にその展望というか、そういうものを本当に考えているのか。最後に、長計の案を決めていないというんですけれども、あの、第2再処理工場建設か、直接処分するかは、電力事業者が選択するというような報道がなされています。齋藤委員長代理にお聞きしますけれども、そんなことをすれば、まったく原子力委員会の責任の放棄ではないのでしょうか。

(木元原子力委員)では齋藤委員長代理。

(齋藤委員長代理)一番初めに申し上げましたように現段階では、どういったシナリオといいますが、オプションを採るかということは決めておりません。まさにこれから22日以降、策定会議で議論するわけでございまして、最後におっしゃったような、直接処分するか、第2再処理工場か、それも含めて今後議論するということでございます。私どもは、あくまでも、我々の独断だけで決めていこうというつもりはまったくございません。しかし、決め後は、それに沿った国としての責任を持つということです。

(木元原子力委員)では、こちらの方、さっきから手を上げてくださっています。

(トマブチ氏)十和田からきましたトマブチと申します。私は農家です。アンケートを取ったんです。道路に立って。十和田、八戸、青森、そして、弘前も行きました。そうしましたら、80パーセントの人が青森県の農産物は、再処理が動いたら、価値が下がるって言いました。私はとても不安なんです。原燃の副社長さんは、私のお客さんに玄関に立って説得してくださるって言いましたけれども、それをお願いするわけにはいかないですよ。どうしてかわかりますか。答えは「・・・」(てんてん)にしときます。それからですね、六ヶ所の方がすごく潤っているって言うておられましたけども、私たちが六ヶ所の方が潤うってことに何にも反対しません。十和田の方に来ないようにバリアをしていただければどれだけでもやってほしいなと思います。それから、芦野さんですか、先程、福島などの廃棄物はどうするんですかと言いましたけれども、どうして青森県だけ、いっぱいいっぱい廃棄物が来るんですか、ほんとに心配なんです。だから、福島などの地元の方にもね、同じ苦しみを味わってもらいたいってことで、地元へ廃棄物を届けておいてほしいと思います。それが

らですね、私もまた、子孫のことを考えると、この再処理施設っていうのは賛成できないなと思っています。地元の身になってほしいなと思います。どうかよろしく願いいたします。
(木元原子力委員) ありがとうございます。もう時計を見るのがこわくなってきました。あとお1人だけ意見うかがいます。

(オカヤマ氏) どうもありがとうございます。私も六ヶ所村です。開拓二世で牛を飼っています。あの、反対の人に聞きたいんですが、是非聞きたいんです。オカヤマと申します。原子力反対、危険だっていうのは、意見としてはわかりますが、現在、我々が生活している中で、原子力が電気に占める割合が3割を超えているんです。今、反対している人たちは、その3割の恩恵を受けていることをどう考えるのか。それから、たとえば、化石燃料で発電しますけども、それから電気だけでなく、今着ている服でも、それから家庭の冷蔵庫でもなんでも石油製品が占める割合は非常に多いと思うんですよ。それを無視して、反対だ、危険だ、とこういう風に言っているのはちょっとおかしいなと思います。それについての反論を聞きたい。それからもうひとつ、危険だ、危険だと言うんですが、例えば、飛行機事故がおきて一度に何百人と死亡します。危険だから、飛行機を飛ばすなという議論をしたことがありますか。まあ、一緒にするのはどうかと思うんですが。電車も同じ、車も同じです。原子力については風評被害が危険で、危ないだろう、だろうという予測で言っているのではないのでしょうか。それからもうひとつ、村民の一人として非常に腹立ちました。原燃マネーに毒されているって、冗談じゃない。そんなことはないです。六ヶ所は、国のエネルギー政策に、貢献して、協力して、村民が選択したんですよ。それが、そういう言い方をされたら、立つ瀬がないじゃないですか。六ヶ所村は国の政策に貢献して協力して、全国民に感謝されてしかるべきですよ。いつでも議論は受け付けます。ですから、反対の人たちに聞きたいのは、今現在、自分たちも恩恵を受けている中で、危険だっていう議論ができるのかな、その辺に意見があるのなら、聞きたい。これから、六ヶ所村はこれから私も含めて、今のスタンスを守った上で、きちんと原燃さんと共存共栄していく道を選ぶべきだと思います。

(木元原子力委員) 今、話をうかがっている途中で、お手が拳がったんですけれども、オカヤマさんのご意見を受けてでしょうか。では、2分でおまとめいただけますか。

(昶氏) まず、原発に反対してるという話でしたけれども、今日は、私は再処理についての話のつもりで来ていて、原発をやめましょうといった覚えはないです。時間が30年前以上に戻せるなら別ですが、もうすでに原発をやって、使用済核燃料も現実問題として出ている。それをこれからどうしようかというときに、今正にそれについて、長期計画を作っているわけですから、日本はこれから、エネルギーないし電気、それからその中でも、原子力はどうやっていくかということは、これから国民的議論をすべきだと思います。という風なことで原発に反対しているわけではないです。

(オカヤマ氏) 私も舌足らずで。原発と一緒に、六ヶ所の再処理工場ですね。これを否定されているというのが私の考えです。そこだとすれば、舌足らずだったと思います。

(木元原子力委員) 質問者に意見ですか。1分をお願いします。

(イマムラ氏) 青森のイマムラです。原発が3分の1というのが出ました。電力の消費が一番多いのはいつですか。高校野球があるときです。あの時に1日で、1億7千万キロワット、8千万キロワットを発電します。そのうち原発はわずか4千5百万キロワットです。それ以外は、他のエネルギーで電気が作られているんです。普通平均するとですね、1日1億2千万キロワットですね。4千5百万キロワットを原発は発電しますから、3分の1だ3分の1だといって電力会社は宣伝するんです。しかし、1億7千万、8千万から4千万キロワット差し引いてください。通常の場合は、原発なくてもちゃんと電気作れるんです。それをごまかして3分の1だと言っている。ここからくりがあるということを指摘しておきたいと思います。そのやり方にごまかされてはならないと思います。私も核燃反対です。ですから、長期計画に、原子力というエネルギーをどうするかという議論をして、最後に核燃問題を議論するなら話は別です。長計の中で、原子力発電は最高1億万キロワットを発電すると言っているわけです。それが今、半分しかない。もんじゅは90年代には動くといったのは、原子力委員会じゃないですか。そういう責任を放棄して、日本の将来の原子力、どうなるか、そのことを何も議論しない。仮に、10年後、20年後、原子力に代わるエネルギーが出てきて、電気を作るということになると、青森県、六ヶ所にゴミだけ残るんです。そのとき、誰が責任を取ってくれるんですか。そのことを先に議論して、エネルギーの歴史を見ると、マキ使っていた、水使っていた、どんどん変わっているんです。原子力も変わると思います。その時にゴミ箱にされたら、青森県たまったものじゃないです。ですから、基本的な議論をちゃんとして、その後にサイクル問題をどうするっていうのなら別だけれども、委員会の議論は先に核燃を議論して、原子力問題は後というのは、これおかしいと思います。そのことだけ指摘させてください。

(木元原子力委員) ありがとうございます。今のことはあまりお答えする立場にないかもしれませんが、とにかく原子力の新しい計画を作るときに、今の一番社会で問題になっているのは何かということで、核燃料サイクルがあがりました。原子力発電は厳然として今発電しているので、原子力発電の現実論はこれからやります。その前に核燃サイクルの今の形がどうなっていくのか、あるいはどういうお考えがあるのかということでご意見を伺っています。それを土台にして今日、伺っております。

すみません、時間を延ばしてしまって。ご意見はまだおありかと思いますが、恐縮ですけれども、お手紙でもFAXでもメールでも結構です。原子力委員会にお寄せいただければ大変うれしく思います。今日は本当に、こういう時間の中で、また、天候のあまりよくない中

で、ご参加いただいてほんとうに深く感謝いたします。できましたら青森以外でも、いろんな形でご意見を承る労力は惜しまないでいようと思います。ほんとうに今日はありがとうございました。今日いただいたご意見はまとめまして10月22日の策定会議に報告させていただきますので、よろしく願いたします。ありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

以上